

2009 年 11 月号 目次

【トピックス】

- 暫定サーベイランスシステム (iNESID) について 1
- 遺伝子組換え食品の検査 5

【感染症発生動向調査】

- 感染症発生動向調査委員会報告 10月 7
- 感染症発生動向調査における病原体検査 10月 10

【検査結果】

- 由来別病原菌検出状況 10月 11

【情報提供】

- 衛生研究所 WEB ページ情報 (21 年度 10 月分) 12

暫定サーベイランスシステム(iNESID)について

衛生研究所では、新型インフルエンザの発生後、定点医療機関における発生動向や病原体検出状況を把握し、情報提供を行っています。

未知のウイルスに対して効果的な対策を検討していくうえでは、国内の感染状況の変化に応じて、迅速に情報収集を行わなければなりません。従来の報告や集計体制では、新型インフルエンザ対策における自治体と厚生労働省との情報交換を円滑に行うためには課題が多いため、暫定的な感染症サーベイランスシステムを構築することが必要となりました。

1 iNESID とは

暫定サーベイランスシステム: interim National Epidemiological Surveillance of Infectious Diseases の略称で、新型インフルエンザの発生を、国や自治体が早期に把握・共有するための暫定的(interim)なサーベイランスシステムのことです。

2 概要

iNESID は、以下の3つのサーベイランスから成り、各サーベイランスにより、目的、報告頻度が異なります。

(1) クラスターサーベイランス - 感染拡大の早期探知 -

ア 目的: 集団での感染(アウトブレイクの端緒)を早期に探知し、感染状況を把握。
放置すれば大規模な流行につながる可能性がある集団的な発生を早期に把握する。
社会福祉施設、医療施設等

イ 入力者: 都道府県、保健所設置市・特別区

ウ 報告: 週報(一週間(月曜日～日曜日)分の検査実施数等を翌週火曜日までに入力し報告)

エ 結果: 第42週～第45週までの累計

集団発生の属性	医療機関	福祉施設等
7日以内に10人以上の患者で集団発生した施設数	0	28

(2) ウイルスサーベイランス - 重症化及びウイルスの性状変化の監視 - <第37週で終了>

ア 目的: 新型と季節性の発生割合の把握及びウイルスの性状変化の監視。
流行している新型インフルエンザウイルスの抗原性、抗インフルエンザウイルス薬への感受性等を調べ、病原性の変化の把握や診断・治療方針の見直し等に役立てる。また、インフルエンザウイルスの型・亜型(A型、H1、H3、新型H1、B型)を調べることにより、流行しているインフルエンザ全体における新型インフルエンザ(A/H1N1)の割合を評価する。

イ 入力者: 地方衛生研究所を所管する都道府県、保健所設置市・特別区

ウ 報告: 週報(一週間(月曜日～日曜日)分の検査実施数及びその結果等を翌週火曜日までに入力し報告)

* ウイルスサーベイランスにおけるiNESIDを用いた厚生労働省への報告については、第38週からは従来通り「感染症サーベイランスシステム(NESID)」の「病原体検出情報システム」による報告になりました。

(3) 入院サーベイランス -重症化及びウイルスの性状変化の監視-

ア 目的:インフルエンザの入院患者の発生及び臨床情報を把握。

新型インフルエンザ(A/H1N1)と診断された入院患者の数及びその臨床情報を把握することにより、当該感染症による重症者の発生動向や病原性の変化等について推察、把握する材料とする。

イ 入力者:都道府県、保健所設置市・特別区

ウ 報告:新型インフルエンザの入院患者を把握した際に、随時報告とともに週報として毎週火曜日に患者状態等の項目を更新し、その日の内に入力し報告。

エ 結果:横浜市では、2009年8月6日から10月31日までに入院した患者は89人でした(男性64人、女性25人)。

性別は7:3で男性に多く、年齢別(図1)にみると、0~9歳が49人(55.1%)と一番多く、次に10~19歳で26人(29.2%)、20歳未満が75人(84.3%)を占めていました。5、8歳が11人、6歳が10人と多く見られました(図2)。

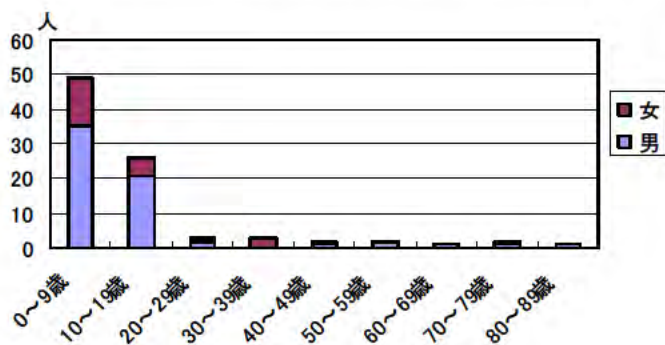


図1 10歳階級別・性別内訳

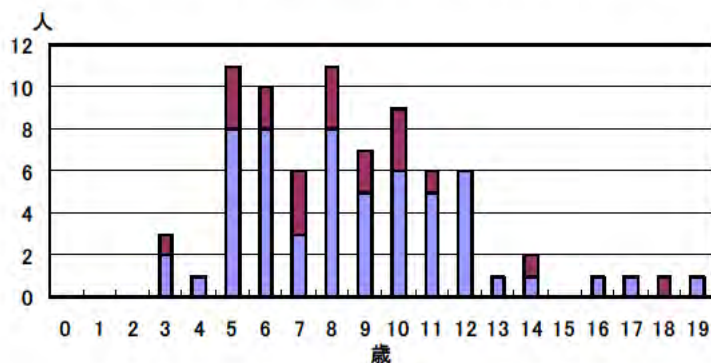


図2 20歳以下における年齢別・性別内訳

・急性脳症(インフルエンザ脳症、ライ症候群等)患者:12歳以下で見られています。

年齢別内訳 (8月6日から10月31日までの入院分)

	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	16	18	20	21	28	35	38	44	46	51	55	68	74	85	計
あり		1	1		2			1	2	1																	8
なし	3		9	9	3	9	7	8	3	5	1	2	1	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	2	1	75
不明						2																					2

・人工呼吸器を利用した患者:13歳以下で見られています。

年齢別内訳 (8月6日から10月31日までの入院分)

	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	16	18	20	21	28	35	38	44	46	51	55	68	74	85	計
あり	1	1	6	1	1	2		1	1	1	1																16
なし	2		4	8	4	9	7	8	4	5			2	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	2		68
不明																										1	1

・基礎疾患を有する患者:慢性呼吸器疾患は幅広い年齢層で見られていますが、「なし」の患者が約68%を占めていました。慢性心疾患、糖尿病、慢性腎疾患は高齢者で見られています。

年齢別内訳 (8月6日から10月31日までの入院分)

慢性呼吸器疾患	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	16	18	20	21	28	35	38	44	46	51	55	68	74	85	計
あり			2	2	2	5	3	3	3	2	1			1	1			1			1		1				28
なし	3	1	9	8	4	6	4	6	3	4		2	1			1	1	1	1	1	1	1		1	2	1	61

慢性心疾患	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	16	18	20	21	28	35	38	44	46	51	55	68	74	85	計
あり																										1	1
なし	3	1	11	10	6	11	7	9	6	6	1	2	1	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	88

糖尿病	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	16	18	20	21	28	35	38	44	46	51	55	68	74	85	計	
あり																										1	1	2
なし	3	1	11	10	6	11	7	9	6	6	1	2	1	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	87	

慢性腎疾患	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	16	18	20	21	28	35	38	44	46	51	55	68	74	85	計
あり																										1	1
なし	3	1	11	10	6	11	7	9	6	6	1	2	1	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	88

基礎疾患のうち、妊娠・疾患や治療に伴う免疫抑制状態・神経疾患・神経筋疾患・血液疾患・小児科領域の慢性疾患・慢性肝疾患についての報告は、ありませんでした。

・その他基礎疾患:14歳以下で見られています。

	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	16	18	20	21	28	35	38	44	46	51	55	68	74	85	計
アトピー					1																						1
周期性嘔吐症												1															1
食物アレルギー							1																				1
川崎病						1																					1
大血管転位術後											1																1
熱性けいれん複雑型											1																1

・患者の状態:約11%が集中治療室での治療を受け、そのうち9人が酸素投与や人工呼吸器を使用していました。また、慢性呼吸器疾患「なし」が7人いました。

患者の状態	計	年齢																								慢性呼吸器疾患			
		3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	16	18	20	21	28	35	38	44	46	51	55	68	74	85	あり	なし
集中治療室外に入院中 31人	酸素投与なし	17	1		2	3	2	1			2	3						1			1		1					4	13
	酸素投与あり	12			2	2		2	1	1	2	1													1			2	10
	人工呼吸器使用	2			1								1															1	1
集中治療室に入院中 10人	酸素投与なし	1																								1		1	
	酸素投与あり	4			2			1		1																	2	2	
	人工呼吸器使用	5		1	1	1	1	1																			1	4	
死亡退院	2			1								1															1	1	
不明	2							1			1																1	1	
転院	1									1																	1		
軽快・治療退院	43	2		2	4	2	5	6	6	2	1		2	1	1	1	1	1	2	1	1	1		1	1	1	15	28	
合計	89	3	1	11	10	6	11	7	9	6	6	1	2	1	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	2	1	28	61

・死亡者

9月17日 12歳・男児 既往症:気管支喘息 死亡原因:頭蓋内血管腫からの頭蓋内出血

10月15日 5歳・男児 既往症:なし 死亡原因:重症肺炎、急性心筋炎

3 他の感染症発生動向調査からの情報

(1) 病原体検出状況

オセルタミビル(商品名:タミフル)耐性の新型インフルエンザウイルス:

11月16日現在、衛生研究所で検出された新型インフルエンザウイルス334株(検体)について調査を行った結果、タミフル耐性を持つ遺伝子変異が確認されたのは、2株(検体)です。

- ・10月28日 新型インフルエンザの感染が確認(9月29日)された患者(6歳・男児)。(神奈川県初めて。全国で12例目)。男児には喘息の基礎疾患がありました。
- ・11月16日 新型インフルエンザの感染が確認(10月16日)された患者(6歳・男児)。(全国で14例目)。男児には基礎疾患がありませんでした。

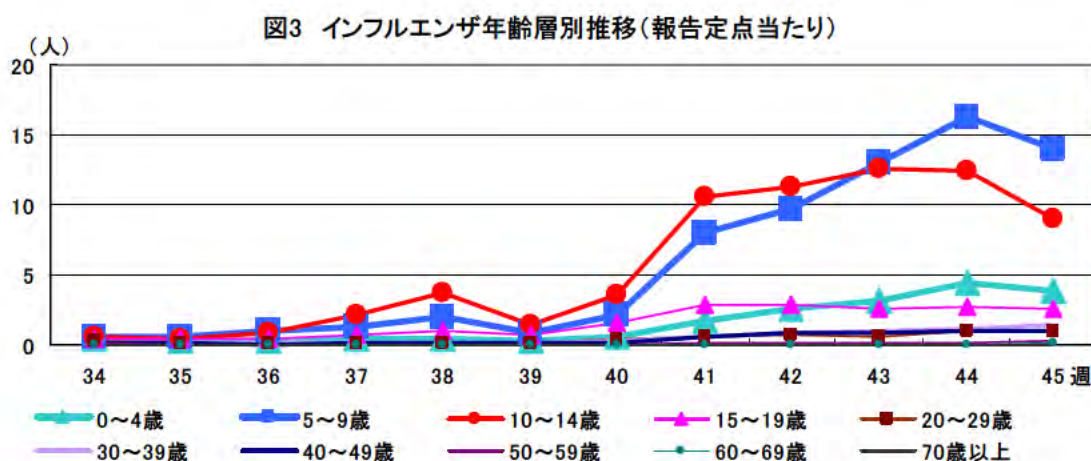
また、7月以降の病原体検出状況は、すべてAH1pdmであり、季節性インフルエンザウイルスは認められていません(AH1pdmの検出状況の詳細は、本誌p9を参照してください。)

(2) インフルエンザの発生動向

第32週(8月3～10日)から、流行の目安となる定点あたりの報告数1を超え、第41週(10月5～11日)に注意報の10を超え、第43週(10月19～25日)には34.0と、警報レベルの30を超えました。第45週(11月2～8日)では、33.1とやや減少が見られましたが、警報レベルの高さです。

感染者は20歳未満の若年層に多く、入院した患者は20歳未満が80%以上を占めていました。基礎疾患を有していない患者も、集中治療室で治療している状況が、見られています。

年齢層別推移(報告定点当たり)を見ると、第42週までは、10～14歳が多かったですが、第43週で同程度、第44週以降、5～9歳が10～14歳よりも多くなっています(図3)。



子どもは重症化しやすく、今後、低年齢層者への感染が広がると予想されると同時に、重症者が増加することを踏まえ、ワクチン接種計画、ウイルスの薬剤耐性や病原性の変化に対する監視が必要と思われます。

また、11月15日に、横浜市3人目の死亡者がでました(72歳 男性 既往症:糖尿病、心不全、陳旧性心筋梗塞、慢性腎不全 死亡原因:低酸素血症)。

遺伝子組換え食品の検査

平成21年9月に、健康安全部食品衛生課及び各福祉保健センターが収去した計49検体について遺伝子組換え食品の検査を実施しました。

遺伝子組換え食品は、内閣府にある食品安全委員会で安全性に問題ないと判断され、承認されたものが国内に流通します。検査は、承認済みのものについては定量検査(食品中に遺伝子組換え品種がどのくらい含まれているかを調べる検査)を行います。一方、未承認のものについては定性検査(食品中に遺伝子組換え品種が含まれているかを調べる検査)を行います。

今回はCaM組込みトウモロコシ(Event176、Bt11、T25、Mon810)及びGA21トウモロコシ¹の定量検査、並びに未承認のBt10トウモロコシ、Btコメ及び55-1パパイヤの定性検査を実施しました。なお、トウモロコシ粉碎品については定量と定性の両方の検査を行いました。

1 定量検査

トウモロコシ粉碎品8検体について、CaM組込みトウモロコシ及びGA21トウモロコシの定量検査を行いました。その結果、いずれも混入率は5%以下²であり、違反検体はありませんでした(表1)。

表1 CaM組込みトウモロコシ及びGA21トウモロコシの定量検査

品名	原産国	検体数	混入率5%を超えた件数
トウモロコシ粉碎品	日本	7	0
	イタリア	1	0

¹ 遺伝子組換えトウモロコシ混入率は、安全性審査を経た5種類の遺伝子組換えトウモロコシ(Event176、Bt11、T25、Mon810、GA21)の各混入率を合計したものになります。そのうち4種類(Event176、Bt11、T25、Mon810)については、共通してCaM(カリフラワーモザイクウイルス由来の35Sプロモーター)配列が組込まれているためスクリーニング検査で4種類の混入率合計値を推定することができます。GA21トウモロコシはCaM配列が組込まれておらず、スクリーニング検査で定量できないため系統特異的定量を行います。スクリーニングの値とGA21の値の合計が5%を超えた場合には、あらためて5種類の系統特異的定量を行う必要があります。

² 安全性審査を経た遺伝子組換え食品は、混入率が5%を超えると表示義務が生じ、「遺伝子組換え」である旨の表示をしなければなりません。一方、5%以下なら表示義務はなく、「遺伝子組換えではない」等の表示をすることもできます(ただし、書類等で確認ができることや意図的に遺伝子組換え食品を混入していないことが前提になります)。そのため、安全性審査を経た遺伝子組換え食品の検査では、混入率が5%を超えているかどうかを調べることになります。

2 定性検査

原材料表示にトウモロコシの記載がある食品25検体(スナック菓子、トウモロコシ粉碎品³、コーンフレークなど)について、Bt10トウモロコシの定性検査を行いました(表2)。結果はコーンフレーク1検体で検知不能⁴がありましたが、その他は不検出でした。また、コメ加工品22検体(ビーフン、米粉など)についてBtコメの定性検査を、パパイヤ2検体について55-1パパイヤの定性検査を行いました。その結果、いずれも不検出であり、違反検体はありませんでした(表3~4)。

表2 Bt10トウモロコシの定性検査

品名	原産国	検体数	検出件数 (検知不能 ⁴ 件数)
スナック菓子	日本	15	0
トウモロコシ粉碎品 ³	日本	7	0
	イタリア	1	0
コーンフレーク	日本	1	0(1)
トルティーヤ	オーストラリア	1	0

³ トウモロコシ粉碎品8検体はCaM組込みトウモロコシ及びGA21トウモロコシの定量検査と同一検体

⁴ 検知不能とは、その作物が固有に持つ遺伝子(内在性遺伝子)も検出されなかったため、結果の判定ができなかったもの。

表3 Btコメの定性検査

品名	原産国	検体数	検出件数
ビーフン	台湾	2	0
	タイ	1	0
	ベトナム	2	0
米粉	日本	6	0
せんべい	日本	5	0
ライスペーパー	ベトナム	2	0
餅	日本	2	0
その他	日本	2	0

表4 55-1パパイヤの定性検査

品名	原産国	検体数	検出件数
果実	アメリカ	2	0

【 食品添加物担当 】

感染症発生動向調査委員会報告 10月

今月のトピックス

市内のインフルエンザの流行が第43週に警報レベルとなりました。
新型インフルエンザで市内初めてオセルタミビル耐性が確認されました。
急性C型肝炎の報告がありました。現在感染源について調査中です。

平成21年 週 - 月日対照表

第39週	9月21～27日
第40週	9月28～10月4日
第41週	10月5～11日
第42週	10月12～18日
第43週	10月19～25日

【患者定点からの情報】

市内の患者定点は、小児科定点:88か所、内科定点:57か所、眼科定点:18か所、性感染症定点:26か所、基幹(病院)定点:3か所の計192か所です。なお、小児科定点は、インフルエンザと小児の13感染症を報告します。内科定点はインフルエンザのみを報告します。従ってインフルエンザは、小児科と内科で、計145定点から報告されます。

平成21年9月21日から平成21年10月25日まで(平成21年第39週から第43週まで。ただし、性感染症については平成21年9月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

全数把握の対象

< 細菌性赤痢 >

チュニジアからの帰国者に見られました。旅行地における感染予防の知識の普及が必要です。海外旅行者のための感染症情報をご活用下さい。

http://www.forth.go.jp/tourist/worldinfo/04_africa/h09_tuni.html

< 腸管出血性大腸菌感染症 >

10月の報告数は、28日現在では4例ですが、9月の委員会後の報告と併せると8例です。9月報告の2歳の女兒にHUSが見られました。近隣の複数自治体では、同一の内臓肉チェーン店からの発生もあり、通常ならば報告数の減っていく時期ですが、今後の発生に注意が必要です。飲食店における腸管出血性大腸菌O157の食中毒対策について

<http://www.mhlw.go.jp/topics/syokuchu/kanren/kanshi/dl/090915-1.pdf> をご参考下さい。

< レジオネラ症 >

10月の報告数は、28日現在で2例です。レジオネラ症についてはこちらをご参考下さい。

<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/disease/legionellosis1.html>

< 急性肝炎(C型) >

1例みられました。輸血後の発病であり、現在輸血によるものか調査中です。急性ウイルス性肝炎につきましては、感染症法に基づき全数保健所への届出が必要です。また、血液由来製剤投与後に急性ウイルス性肝炎を認めた場合は、薬事法に基づき製造販売業者等への情報提供が必要になります。

詳しくは

厚生労働省輸血療法の実施に関する指針

<http://www.hourei.mhlw.go.jp/hourei/doc/tsuchi/2004I2102200021.pdf>

血液製剤等に係る遡及調査ガイドライン

<http://www.mhlw.go.jp/new-info/kobetu/iyaku/kenketsugo/dl/5anzen4a.pdf> をご参考下さい。

<梅毒>

10月の報告数は2例ですが、うち1例は晩期顕症梅毒でした。梅毒は予防と治療が双方共可能な疾病です。感染予防と、後遺症を残さない時期での早期発見のため、今後の啓発が重要と思われます。

梅毒についてはこちらをご参考下さい。

<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/disease/syphilis1.html>

<HIV 感染>

10月の報告数は2例で、うち1例はAIDSの状態でした。また、1例は同性間の性的接触によるものでした。HIV感染症に関して治癒に到る治療法が無い現状の中で、日本人男性の同性間での性的接触による感染は増加しており、今後感染予防と早期発見の更なる対策が必要です。

平成20年の現状についてはこちらをご参考下さい。 <http://idsc.nih.go.jp/iasr/30/355/tpc355-j.html>

<破傷風>

1例の報告がありました。46歳の男性です。微細な外傷によるものと思われます。全国でも、破傷風の防御抗体レベルの下限0.01IU/ml未満は40歳以上に多く、患者も多くが40歳以上で見られています。尚DPTは1968年から行われていますが、1970年代の百日咳ワクチン禍による接種率の一時的な低下の時期があったことにも注意が必要と思われます。

平成20年末現在の情報をご参考下さい。 <http://idsc.nih.go.jp/iasr/30/349/tpc349-j.html>

<急性脳炎>

10月の報告数は2例です。4歳と10歳に見られ、インフルエンザによるものでした。先月までに発生のあった2例は6歳と11歳であり、季節性インフルエンザに比べると比較的年長児に見られています。

インフルエンザ脳症について平成15年11月より全数届出となっています。季節性インフルエンザによる脳症の状況につきましては、こちらをご参考下さい。

<http://idsc.nih.go.jp/iasr/26/309/dj3093.html>

<http://idsc.nih.go.jp/iasr/23/274/dj2742.html>

定点把握の対象

<インフルエンザ>

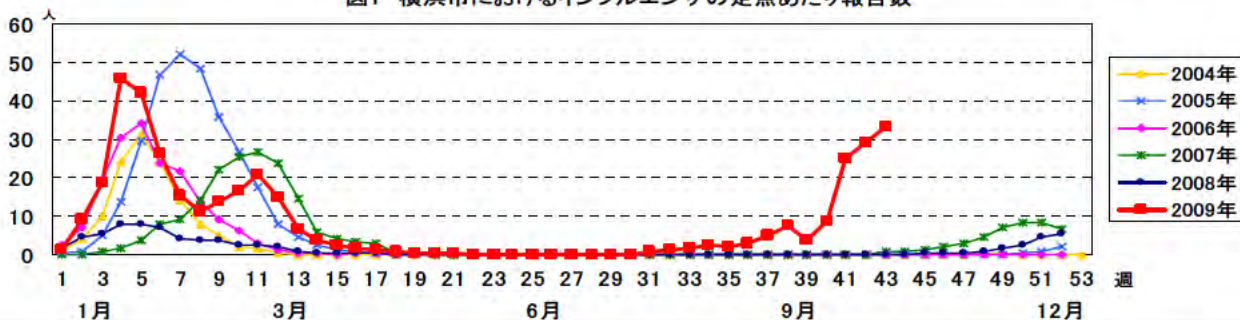
第41週には流行の注意報レベルである「10」を超えましたが、第43週には定点あたり33.33と、警報のレベル「30」を超えています。例年にない早い時期での警報です。行政区別では、瀬谷区68.29、泉区54.14、都筑区52.80、緑区47.40、その他港南区、磯子区、港北区、青葉区、旭区、戸塚区の計10区が定点あたりの報告数30を超えており、注意報レベルである「10」を超えていないのは、中区の8.71のみです。全国では24.62、神奈川県(横浜、川崎を除く 以下県域)では26.29、川崎市では27.15、東京都では25.24と何れも横浜より低い数値です。

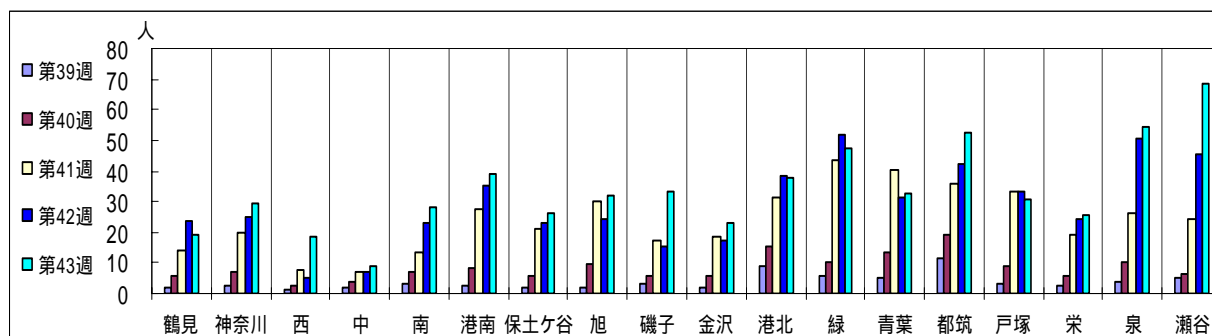
また病原体検出状況では、7月以降すべて新型インフルエンザAH1pdmが確認され、季節性インフルエンザは確認されていません。第36週(8月31日からの週)から第40週(9月28日からの週)までのインフルエンザ(疑い含む)とされた30検体について、23検体にAH1pdmが検出(うち1検体はhMPV(PCR)も検出)され、1検体はhMPV(PCR)のみが検出されています。残り6検体については現在培養中です。今のところ季節性インフルエンザについては検出されていません。

オセルタミビル耐性を示唆する遺伝子変異(H275Y)が1例確認されました。オセルタミビルに感受性を持つ季節性インフルエンザH1N1に比べると、310倍くらい感受性が低下していました(IC50 31.1nM)。ザナミビルへの感受性は保持していました。

また今までに解析した29株すべてに、アマンタジン耐性を示唆する遺伝子変異(S31N)が見られています。

図1 横浜市におけるインフルエンザの定点あたり報告数





< 感染性胃腸炎 >

定点あたりの報告は1.56と低値の状態ですが、すでに、市内の学校でノロウイルスによる集団感染が確認されており、今後の流行に注意が必要です。全国では2.37、神奈川県県域では2.39、川崎市では2.55、東京都では2.19と何れも横浜より高い数値です。

< 性感染症 >

性感染症は、診療科でみると産婦人科系の11定点、および泌尿器科・皮膚科系の15定点からの報告に基づき、1か月単位で集計されています。

9月は、性器クラミジア感染症は男性11例、女性16例、性器ヘルペスウイルス感染症は男性3例、女性7例。尖圭コンジローマは男性6例、女性3例、淋菌感染症は男性11例、女性1例が報告されています。

【病原体定点からの情報】

市内の病原体定点は、小児科定点：8か所、インフルエンザ(内科)定点：5か所、眼科定点：1か所、基幹(病院)定点：3か所の計17か所を設定しています。

検体採取は、小児科定点8か所を2グループに分け、4か所ごと毎週実施し、インフルエンザ定点は特に冬季のインフルエンザ流行時に実施しています。眼科と基幹定点は、対象疾患の患者から検体採取ができた時に随時実施しています。

衛生研究所から

< ウイルス検査 >

2009年10月に病原体定点から搬入された検体は、小児科定点38件(鼻咽頭ぬぐい液)、内科定点13件(鼻咽頭ぬぐい液)でした。患者の臨床症状別内訳は、小児科定点はインフルエンザ(疑いを含む)28人、咽頭炎・気道炎7人、RSV感染症、耳下腺炎、発疹症各1人、内科定点はインフルエンザ12人、気道炎1人でした。

11月10日現在、インフルエンザ患者(小児科定点26人、内科定点12人)と気道炎患者(小児科定点2人、内科定点1人)合わせて41人から、新型インフルエンザウイルス(AH1pdm)が分離されています。これ以外にPCR検査では、小児科定点のRSV感染症患者1人からRSウイルス、気道炎患者1人からコクサーキーウイルスA6型ウイルスの遺伝子が検出されています。また、小児科定点のAH1pdmが分離されたインフルエンザ患者1人からはヒトメタニューモウイルスの遺伝子も検出されています。

その他の検体は引き続き検査中です。

< 細菌検査 >

10月の感染性胃腸炎関係の大腸菌株の受付は11株で毒素原性大腸菌が1件検出されました。

溶血性レンサ球菌咽頭炎の検体受付は4件でA群溶血性レンサ球菌が2件から検出されました。

【 感染症・疫学情報課 検査研究課 ウイルス担当 】

感染症発生動向調査における病原体検査10月

感染性胃腸炎

検査年月 定点の区別 件数	10月		2009年1～10月	
	小児科	基幹	小児科	基幹
菌種名				
サルモネラ				
腸管病原性大腸菌				4
毒素原性大腸菌		1		5
組織侵入性大腸菌				
腸管出血性大腸菌				6
腸管凝集性大腸菌				
黄色ブドウ球菌				
カンピロバクター			3	
不検出		10	12	72

呼吸器感染症等

検査年月 定点の区別 件数	10月		2009年1～10月	
	小児科	基幹	小児科	基幹
菌種名				
A群溶血性レンサ球菌				
T1			3	
T2			1	
T3			8	
T4			5	
T6			1	
T12			14	
T13	1		1	
T25			2	
T28	1		8	
T B3264			3	
T 型別不能			2	
B群溶血性レンサ球菌			1	
G群溶血性レンサ球菌				
百日咳菌			1	
黄色ブドウ球菌				1
髄膜炎菌				
インフルエンザ菌				1
肺炎球菌				1
大腸菌				1
不検出	2		22	1

T(T型別): A群溶血性レンサ球菌の菌体表面のトリプシン耐性T蛋白を用いた型別方法

【細菌担当】

由来別病原菌検出状況 10月

取り扱い件数	109		52	
検体の種類	ヒト		食品	
分離菌株数	糞便、尿、咽頭ぬぐい液、 喀痰等 菌株による依頼を含む		食品、食品容器等のふきとり、 飲料水等	
菌種名	10月	2009年1-10月	10月	2009年1-10月
コレラ O - 1				
O - 1以外		2		
赤痢菌 A				
B		1		
C				
D		7		
その他	1	1		
チフス菌				
パラチフスA菌		1		
その他のサルモネラ				
O4群		1		
O7群		1		
O8群		2		
O9群	1	1		
O3,10群				
その他				
腸管病原性大腸菌		4		
毒素原性大腸菌	2	6		
組織侵入性大腸菌				
腸管出血性大腸菌	4	68		
腸管凝集性大腸菌				
腸炎ピブリオ		1		
黄色ブドウ球菌	2 ^{*1}	28	2	
カンピロバクター		34	3	
ウェルシュ菌		11		
A群溶血性レンサ球菌	2	48		
B群溶血性レンサ球菌		1		
レジオネラ	1	3		
セレウス菌			2	
インフルエンザ菌		1		
肺炎球菌		1		
百日咳菌		1		
VRE		1		
その他				

^{*1} メチシリン耐性黄色ブドウ球菌

衛生研究所WEBページ情報

(アクセス件数・順位 21年度9月分、電子メールによる問い合わせ・追加・更新記事 21年度10月分)

横浜市衛生研究所ホームページ(衛生研究所WEBページ)は、1998年3月に開設され、感染症情報、保健情報、食品衛生情報、生活環境衛生情報等を提供しています。

2008年4月、市民にわかりやすくかつ迅速な情報提供を目指して、リニューアルを行いました。

今回は、2009年9月のアクセス件数、アクセス順位及び2009年10月の電子メールによる問い合わせ、WEB追加・更新記事について報告します。

なお、アクセス件数については行政運営調整局IT活用推進課から提供されたデータを基に集計しました。

1 利用状況

(1) アクセス件数 (2009年9月)

2009年9月の総アクセス数は、232,419件でした。主な内訳は、感染症66.1%、食品衛生11.1%、保健情報8.5%、検査情報月報2.9%、生活環境衛生1.8%、薬事1.6%でした。

(2) アクセス順位 (2009年9月)

9月のアクセス順位(表1)は、第1位が「トリコモナス感染症について」、第2位が「インフルエンザ情報(速報)」、第3位が「感染症発生状況」でした。

第1位に「トリコモナス感染症について」が入りました。

これは、Yahooニュースのサイエンスのトップ記事で、米国のナショナル・ジオグラフィックという雑誌の「無敵のT・レックスは寄生虫に負けた?」という記事

(<http://zasshi.news.yahoo.co.jp/article?a=20090930-00000000-natiogeo-int>) がとりあげられました。

この寄生虫がトリコモナスということでYahooニュースから「トリコモナス感染症について」にリンクが張られたことによる影響と思われます。

第2～3位、5、7～8位と「感染症情報」(特にインフルエンザ情報)が入りました。これは、新型インフルエンザの流行によるアクセス件数の増加と考えられます。

先月と同様に、上位10位以内に「マイコプラズマ肺炎」、「大麻(マリファナ)について」が入っていました。

国立感染症情報センターの報告によると、「マイコプラズマ肺炎」は、40週(2009年9/28～10/4)以降、定点当たりの報告数が増加しています。

「大麻(マリファナ)について」は、7月初旬に、有名芸能人の覚せい剤所持・使用事件や合成麻薬MDMA関連の事件が相次ぎ、9月に入っても感心が高かったものと思われます。

表1 2009年9月 アクセス順位

順位	タイトル	件数
1	トリコモナス感染症について	18,324
2	インフルエンザ情報(速報)	10,484
3	感染症発生状況	8,203
4	マイコプラズマ肺炎について	6,674
5	臨時情報(インフルエンザ情報バックナンバー等)	3,577
6	大麻(マリファナ)について	3,259
7	2009年第37週(9月7日から9月13日)	2,874
8	インフルエンザについて	2,376
9	性器ヘルペス感染症について	2,346
10	梅毒について	2,313

データ提供: 行政運営調整局IT活用推進課

(3) 電子メールによる問い合わせ (2009年10月)

2009年10月にホームページのお問合わせフォームを通していただいた電子メールによる問い合わせの合計は、5件でした(表2)。

表2 2009年10月 電子メールによる問い合わせ

内容	件数	回答部署
飲食店の衛生状況について	1	衛生研究所
ダニの論文について(その3)	1	衛生研究所
季節性インフルエンザワクチンについて	1	衛生研究所
センナを含むお茶について	1	衛生研究所
ダニの論文について	1	衛生研究所

2 追加・更新記事 (2009年10月)

2009年10月に追加・更新した主な記事は、11件でした(表3)。

新型インフルエンザの影響でアクセス件数が増加、今度はちがいましたので、お知らせいたします。

表3 2009年10月 追加・更新記事

掲載月日	内容	備考
10月1日	横浜市における麻しん患者届出状況 (2009年)	追加
10月2日	妊産婦の喫煙行動に関する研究(平成17年~18年)について	追加
10月2日	日本脳炎について	更新
10月2日	感染症に気をつけよう(10月号)	追加
10月13日	2009年度季節性インフルエンザワクチンについて	追加
10月19日	インフルエンザワクチンについて	更新
10月20日	ヒト-パピローマウイルスと子宮頸癌について	更新
10月20日	肺炎球菌感染症について	更新
10月28日	ウエストナイルウイルス(蚊)の検査結果	追加
10月29日	高病原性鳥インフルエンザ(HPAI)の発生状況	更新
10月29日	横浜市インフルエンザ等流行情報 7号	更新

【 感染症・疫学情報課 】